

Ⅱ. ジブチ共和国における調査

第1 ジブチ共和国の概況

(基本データ)

面積：2万3,200平方キロメートル（四国の約1.3倍）

人口：117万人（2024年、世銀）

首都：ジブチ

民族：ソマリア系イッサ族（50%）、エチオピア系アフール族（37%）

言語：アラビア語、仏語

宗教：イスラム教（94%）、キリスト教（6%）

政体：共和制

議会：国民議会（65議席）

主要産業：運輸（ジブチ港湾サービス、ジブチ鉄道）

GDP（2024年：世銀）：41億米ドル

一人当たりGDP（2024年：世銀）：3,497米ドル

経済成長率（2024年：世銀）：6.0%

物価上昇率（消費者物価）（2024年：世銀）：2.1%

在留邦人数：53人（2025年12月現在）

1. 内政

1977年にフランスから独立を達成するが、以降、ジブチ住民の大部分が属するイッサ族（ソマリア系）とアフール族（エチオピア系）の対立を背景とする紛争が繰り返されてきた。2000年、政府と反政府武装組織の間で和平枠組み合意が署名され、翌2001年5月に最終和平案が合意され、それ以降、民族間のバランスを取る国内統治により内政は安定している。

1999年に就任したゲレ大統領は、2021年4月に5選を果たした。この間、憲法改正により、大統領任期の短縮、再選回数の制限撤廃及び大統領候補となるための年齢制限（40歳以上75歳以下）が導入されるも、2025年10月の憲法改正で大統領候補となるための年齢上限が撤廃された。

2. 外交

旧宗主国フランスとの関係を基軸として、エチオピア、ソマリア等近隣諸国及びサウジアラビアを中心とするアラブ諸国とのバランスのとれた友好・協力関係の維持に努めている。

不安定な「アフリカの角」地域における安定的なパートナーとして、伝統的に外国軍の基地を積極的に受け入れている。フランス（駐留兵士約1,500名、フランスにと

って国外最大の基地)、米国(駐留兵士約4,000名、アフリカ随一の規模の米軍基地、アフリカの角地域統合任務部隊(CJTF-HOA)司令部が所在)、イタリア、スペイン、中国が駐留。また、我が国をはじめ、ソマリア沖海賊対処にあたる各国は主にジブチを拠点としている。

中国は、港湾・鉄道を始めとしたインフラ設備への投融資で存在感を示す。ジブチの対外債務(GDP比65%)のうち約半分は対中債務(対外債務比54%)である。また、2017年8月には、中国として外国における初めての軍事基地の運用が開始された。

アフリカの角地域機構であるIGAD(政府間開発機構)の本部があり。スーダン、ソマリア等地域情勢に積極的に関与している。

3. 経済

国土の大半が砂漠地帯という厳しい自然環境等もあり、土地の生産性は低く、農業は未発達である。経済は、港湾収入・中継貿易等の運輸業、各国軍駐留による利用料等に依存する偏った経済構造となっている。

政府は2014年に長期開発計画であるDjibouti Vision 2035を策定し、開発政策を実施している。近年、地域内の貿易・商業ハブになるとの国家目標を掲げ、中国の支援を受け、港湾や鉄道等の大型インフラ事業に着手している。他方、インフラ事業の実施に伴い、対外債務が増大している。

4. 二国間関係

(1) 政治関係

ジブチ沖航路は欧州とインド太平洋を結ぶ世界貿易の大動脈に位置している。2023年11月の中東情勢悪化以前、アデン湾の船舶通航(約1.9万隻/年)中、約1割(約1,700隻)は日本関係であり、ソマリア沖・アデン湾の海賊事案(2008年頃から多発)に対処するため、日本は自衛隊の水上部隊(2009年3月～、現在海上自衛隊約200名、護衛艦1隻)、航空隊(2009年6月～、現在海上自衛隊約60名、P-3C1機)、支援隊(現在陸・海・空自衛隊約130名)を派遣している。

1977年のジブチ独立・翌1978年の両国の外交関係樹立後も我が国はジブチに大使館(実館)を置いていなかった(ジブチは在京大使館を1989年4月に開設)。2009年の自衛隊派遣以来、二国間関係は急速に緊密化し、我が国は2009年3月に連絡事務所を設置、2010年4月に兼勤駐在官事務所、2012年1月に大使館へ格上げした。2013年の安倍総理訪問以降、外務省・防衛省の政務が頻繁に訪問。ジブチからはゲレ大統領が7度訪日している。2025年8月のTICAD9にはオマール外相が参加した。

(2) 経済関係

対日貿易額・主要貿易品目(2024年財務省貿易統計)

輸出 94.5億円 魚介類

輸入 1,971 万円 自動車、鉄鋼、一般機械
日本からの進出企業 4 社 (2025 年 12 月現在)

(3) 二国間条約・取極

1999 年 青年海外協力隊派遣取極

2005 年 技術協力協定取極

2009 年 ジブチ共和国における日本国の自衛隊等の地位に関する日本国政府とジブチ共和国政府との間の交換公文

(出所) 外務省資料等より作成

第2 我が国のODA実績

1. 対ジブチ開発協力の意義

ジブチは、アジア・中東・アフリカ及び欧州を繋ぐ海上交通路に位置し、エチオピア、南スーダンなど近隣内陸国の外港機能を担っている。ジブチ沖のアデン湾及びソマリア沖では年間でおおよそ 20,000 隻の船舶が航行している。我が国は 2009 年からジブチを拠点として自衛隊を派遣し、同海域における海賊対処活動に貢献している。ジブチは、不安定なアフリカの角地域にあって、国内情勢が安定していることから、米軍や仏軍をはじめとする各国軍を受け入れており、国際安全保障上の拠点として重要な役割を果たしている。

政府は、以上の状況を踏まえ、国際場裡における我が国の重要なパートナーであるジブチの経済社会開発分野における自助努力を支援することは、ジブチ国内の様々な課題解決を後押しするとともに、同国の国家基盤の強化を通じて東アフリカ地域の安定化及び地域経済の活性化、さらに、自由で開かれたインド太平洋（FOIP）の実現に貢献するものであり、支援の意義は大きいとしている。

2. 対ジブチ開発協力の重点分野

対ジブチ共和国国別開発協力方針（2019 年 9 月）では、「地域安定化に資する持続可能な経済社会開発への支援」を掲げ、以下の重点分野に取り組むとしている。

①持続可能な経済成長に資する経済社会基盤強化

首都ジブチ市を中心とした近年の港湾・物流等の主要産業の発展により、環境への影響の懸念、電力エネルギー等のインフラ需要の急速な高まり、都市部と地方部の開発格差といった国内課題への対処が急務となっている。これらの課題を解決し、ジブチの社会的・経済的安定を確実なものとするために、産業インフラ整備や国民の基礎生活環境の改善を支援する。

（案件例）

- ・タジュラ湾海上輸送能力強化計画（無償資金協力 交換公文締結：2019 年 9 月 供与限度額 40.81 億円）
- ・パルマレ道路橋梁建設計画（無償資金協力 交換公文締結：2024 年 1 月 供与限度額 59.44 億円）
- ・ジブチ市三次医療病院における医療機材整備計画（無償資金協力 交換公文締結：2023 年 5 月 供与限度額 5.90 億円）

②経済成長を下支えする人材の育成

基礎教育環境の整備等を通じて教育の質を向上させ、ジブチの持続的成長に寄与する人材育成を支援する。また、国内失業率の高止まり（2017 年のジブチの国内失業率：47%（出典：世界銀行））という現状に鑑み、ジブチの産業多角化及び雇用機会増加に繋がる人材育成を支援する。

（案件例）

- ・バルバラ地区ナッシブにおける小中学校建設計画（新渡戸稲造基礎教育学校）（無償資金協力 交換公文締結：2020年8月 供与限度額：20.92億円）

③地域の安定化努力支援

ソマリア等の周辺国の不安定な情勢に起因する海上犯罪（海賊、不法入国、密輸・密漁等）等の問題に対処するため、ジブチ政府の海上保安能力強化等の支援を実施する。また、アフリカの角地域における安定国として積極的な難民・移民受入れ政策を展開するジブチ政府の努力を後押しするため、関連する国際機関及びNGO等と協力しつつ、難民・移民に付随する各種課題への対応に対する支援を行う。

（案件例）

- ・海上保安能力向上計画（無償資金協力 交換公文締結：2021年12月、2022年12月 供与限度額：29.46億円、追贈4.77億円）

（参考） 我が国の対ジブチ経済協力実績

（単位：億円）

年度	円借款	無償資金協力	技術協力
2019	-	3.65	7.12
2020	-	48.84	3.18
2021	-	45.08	11.49
2022	-	7.96	6.19
2023	-	11.87	5.30
累計	-	476.52	98.96

- （注）1. 年度の区分及び金額は原則、円借款及び無償資金協力は交換公文ベース、技術協力は予算年度の経費実績ベースによる。
2. 四捨五入の関係上、合計が一致しないことがある。

（出所）外務省資料等より作成

第3 調査の概要

1. 新渡戸稲造基礎教育学校（バルバラ地区ナッシブにおける小中学校建設計画）（無償資金協力）

（1）事業の概要

ジブチ政府は初等から前期中等教育終了までの9年間を基礎教育に位置付け、無償の義務教育として保障し、教育施設の整備や教育内容の改善に取り組んでいる。その結果、初等教育の粗就学率（注）は大幅に改善（92.9%（2018年））したが、前期中等教育の粗就学率は、依然として低い（66.2%（2018年））状態であった。また、前期中等教育1年目の中退率は高く（8.9%（2017年））、初等から前期中等教育への接続に課題があった。このような状況を踏まえ、同国政府は小学校と中学校を併設した「基礎教育学校」の設置により中学校へのアクセス改善と教育技術面での強化を図る方針を掲げた。ジブチ市郊外のバルバラ地区は、新たに都市化を行う拠点に指定された地域の一つであり、中でもナッシブは開発が最も進んだ地域で、就学人口の伸びが著しく、中学校も未整備のため、教育施設の整備が急務となっていた。

（注）「粗就学率」：学齢人口に対し、当該年齢外も含む就学者の比率。

本協力は、ジブチ市バルバラ地区において小中学校併設校を建設し必要機材を整備するものであり、これにより同地域の基礎教育アクセスの拡大及び就学環境の改善を図り、当国の教育のアクセスと質の向上に寄与することとされている。

今回派遣団が訪問した「新渡戸稲造基礎教育学校」は、本事業より建設され、2024年に小中学校併設校として開校したものである。

○交換公文締結：2020年8月

○供与限度額：20.92億円

（2）視察の概要

派遣団は、新渡戸稲造基礎教育学校を訪問した。同学校においては、小学校の情報の授業（タブレット端末で写真を撮る実習）、体育の授業、中学校の理科の授業（バナナからDNAを取り出す実験）等を視察した後、同校の小学校・中学校各校長及びジブチ国民教育・職業訓練省幹部職員との意見交換を行った。各授業ではJICA海外協力隊の隊員による支援が行われており、体育の授業ではバスケットボールのコーチ、理科の授業では児童の実験のサポートを行っている様子を視察した。



（写真）情報の授業でタブレットを使用する児童

<説明概要>

(新渡戸稲造基礎教育学校校長(小学校)) バルバラ地区ではこの学校ができる前はこどもたちの教育状況は全く良くなかったが、本校が2024年に開校して以来、こどもたちは先端的な教育を受けられ、大変勉学に励むようになった。日本政府及び日本の国民の皆様には感謝を申し上げたい。本校は日本とジブチの友好関係を象徴するものであり、「新渡戸稲造」の名を冠する学校で教育をできることが大変光栄である。また、本校で活動しているJICA海外協力隊員のプロフェッショナリズムは教育の質を担保する上で非常に重要であり、この場を借りて感謝申し上げる。

(ジブチ国民教育・職業訓練省前期中等教育課長) 日本のジブチに対すとりわけ教育分野における支援に感謝している。1995年に日本の援助によりフクザワ中学校が開校したが、私は同中学校の校長を9年ほど務めていた。同中学校に対して日本が供与してくれた建物や機材は、こどもたちによって授業に活用されるだけでなく、彼らが将来の開発の主要なアクターとして活躍していくために必要な基礎を築くものとなっている。

<質疑応答>

(Q) ジブチではどんどんこどもたちが増えていて教室が足りないくらいだと伺った。この学校の生徒の人数はどのくらいなのか。

(A) 新渡戸稲造基礎教育学校の生徒数は合計約2,600名(女子生徒が約1,200名、男子生徒が約1,400名)である。なお、フクザワ中学校は約2,800人である。

(Q) 日本について学ぶような授業はあるのか。

(A) 9年生(中学)になると歴史の授業で学ぶことになっている。

(Q) もともとジブチにあった学校と日本の援助で作られた学校とでは、例えばカリキュラム等で何か特徴的なものがあるのか。日本の学校ができたことによりこどもたちに何か変化はあったのか。

(A) 従来の学校ではやはり教室数が足りない。スポーツを行う体育館や理科の実験など何かに特化した施設も少なく、仮に理科室などがあってもその中に物が全然ないという状態で実験もできない。これに対して、新渡戸稲造基礎教育学校は



(写真) 新渡戸稲造基礎教育学校

理科の実験をできる部屋もある。こどもたちの一番の変化は、規律というものを学ぶようになったということである。フクザワ中学校や新渡戸稲造基礎教育学校といった大きい学校に限らず、日本はもう少し小さい支援のスキームでいくつもの中学校や小学校も作っていて、そういったところからも日本の精神が浸透している。

2. ジブチ沿岸警備隊（無償資金協力、技術協力）

（1）事業の概要

ジブチはスエズ運河に接続する紅海の入口の東側に位置し、同国沖の海域は年間約2万隻もの船舶が通航するアジア、アフリカ、欧州を結ぶ海上交通路の要衝となっている。しかし、2000年代以降、海賊被害が多発しているほか、密航・密漁・密輸等の違法行為や難民の海難事故等の問題が生じているため、ジブチ政府は、2010年12月、海上安全・警備を所管し、海賊や難民・移民、密輸・密漁等の問題に対処する海上法執行機関として、ジブチ沿岸警備隊（DCG）を設立した。同国海域におけるDCGによる哨戒は、特に紅海の入り口であるバブ・エル・マンデブ海峡を中心に、引き続き重要性が高くなっていることから、我が国は、巡視艇の供与、DCGの能力向上等の支援を行っている。

（ア）海上保安能力向上のための巡視艇建造計画（無償資金協力）

本協力では、DCGに対し巡視艇（20m級）2隻を供与した。

○交換公文締結：2014年3月（2015年供与）

○供与限度額：9.24億円

（イ）平成29年度経済社会開発計画（無償資金協力）

本協力では、DCGに対し巡視艇（19m級）1隻を供与した。

○交換公文署名：2018年2月（2021年供与）

○供与額：1.5億円

（ウ）海上保安能力向上計画（無償資金協力）

本協力は、従前のDCG保有船艇35隻のうち同海峡での安全な哨戒が可能な船艇は巡視艇2隻のみで、年間を通じた遠洋海域における安定性を備えた巡視艇の整備が急務となっていることから、巡視艇（35m級2隻）及び浮棧橋を整備することにより、海難救助や海上法執行等の業務を迅速かつ適切に実施するための能力向上を図り、もってバブ・エル・マンデブ海峡を含む同国領海域における海上安全の向上に寄与することとされた。

2025年4月、ジブチにおいて、本協力で支援された35m巡視艇2隻と浮棧橋の供与式典が開催され、ジブチ側からゲレ大統領、ハッサン・インフラ設備大臣、ワイス沿岸警備隊長官ほか政府関係者、日本側から日本大使、JICAジブチ事務所長らが出席した。

○交換公文締結：2021年12月



（写真）日本が供与した35メートル級巡視艇

○供与限度額：29.46 億円

（エ）沿岸警備隊能力拡充プロジェクトフェーズ3（技術協力）

本協力は、DCGのより高度な法執行に係る技術及び訓練能力並びに巡視艇の運航・維持管理にかかる能力を向上させることにより、DCGの法執行にかかる現場対応能力の向上を支援するものである。

○協力期間：2019年10月～2026年3月

（2）視察の概要

派遣団は、沿岸警備隊を訪問し、日本が供与した最新の巡視艇に試乗し、ワイス沿岸警備隊長官の案内により湾内の海上視察を行った。

＜説明概要＞

バブ・エル・マンデブ海峡から西は紅海であり、太平洋とヨーロッパを結んでいる。海峡の幅は32キロメートルしかないが、世界の貿易の約2割がここを通過して行われている。対岸のイエメン側にはすぐそこに過激派の拠点があり、私たちが海域を監視して治安を守っている。

日本からは巡視艇の供与のほかにも、JICAの専門家が沿岸警備隊に派遣され、何年にもわたって技術支援を受けている。

＜質疑応答＞

（Q）巡視艇の運用はどのようになっているのか。

（A）巡視艇は、ジブチ港を出港して、西方のバブ・エル・マンデブ海峡までの海域で約2週間活動した後、給油のためにジブチ港に戻り、給油を終えるとまた出港するという過程を繰り返すことになる。



（写真）巡視艇の甲板上でワイス長官の説明を受ける

第4 自衛隊活動拠点の視察

ソマリア沖・アデン湾では2008年から海賊による被害が拡大し、こうした状況に対して、我が国は、2009年以降、自衛隊の部隊がアデン湾に面するジブチを拠点に海賊行為に対処するための護衛活動及び警戒監視活動を行っている。

海賊対処行動を行う自衛隊の派遣部隊としては、アデン湾で護衛艦おおなみによる船舶の護衛を行う「派遣海賊対処行動水上部隊」、P-3C哨戒機により空からの監視を行う「派遣海賊対処行動航空隊」、自衛隊活動拠点の維持管理や警備を行う「派遣海賊対処行動支援隊」が派遣されている。自衛隊活動拠点は、航空隊を効率的かつ効果的に運用するためにジブチ国際空港北西地区に整備され、2011年から運用を開始している（支援隊約130名、航空隊約60名が所在）。

派遣団は、ジブチにおける自衛隊活動拠点を訪問し、支援隊の田中司令及び航空隊の山越司令からジブチにおける自衛隊の活動拠点の位置関係・施設・人員、海賊対処部隊の編成、海賊対処行動の概況、在外邦人等の安全確保等に関する取組等について説明を聴取した後、隊員が生活する隊舎、厚生施設等を視察した。

<説明概要>

自衛隊のジブチ活動拠点は自衛隊唯一の海外拠点であり、2011年6月に完成して今年で15周年を迎える。この拠点はジブチ国際空港に隣接しており、滑走路から直接ハンガー（格納庫）に入ることができる。周辺には各国軍の基地があり、狭い地域に同盟・同志国が集中して所在する希少な場所であり、防衛協力・交流が容易にできる。

拠点施設は勤務隊舎のほか、生活隊舎、医務室、食堂、体育館、厚生棟がある。施設が老朽化しているが、逐次新たな建物等を建てて拠点を維持している。

この拠点の意義としては、①インド太平洋地域の西端に位置し、海賊対処行動の拠点として我が国のシーレーンの安定及びF O I Pの推進に貢献、②各国との防衛協力・交流の拠点として、我が国にとっての望ましい安全保障環境の創出に貢献、③中東・アフリカ地域における在外法人等の安全確保のための拠点又は中継地として、国民の生命財産の保護に貢献、という3点が挙げられる。

また、陸上自衛隊の施設部隊の隊員が派遣され、ジブチ陸軍の工兵部隊に災害目的の能力構築支援も行っている。令和7年度からODAで供与された施設・機材を用いて先月活動を終了したところである。2025年12月からはジブチの軍楽隊に対する支援を開始した。ジブチ軍はもとより、米仏独西伊の各国駐留軍とは、指揮官、実務者それぞれの交流や情報交換等により信頼関係の醸成を図っているほか、スポーツ交流も行っている。



(写真) 自衛隊活動拠点

第5 意見交換の概要

1. オマール外務・国際協力大臣との意見交換

派遣団は、1月7日、外務・国際協力省において、オマール外務・国際協力大臣と意見交換を行った。

(大臣) ジブチに対する日本の支援はインフラ分野をはじめ社会分野など多岐にわたっており感謝する。日本が支援したプロジェクトの中でも、1995年のフクザワ中学校の開校は、この地域に中学校ができたということにとどまらず、日本政府に対する印象の変化をもたらした。

(派遣団) 昨年8月に横浜で開催されたT I C A D 9の主要なテーマの一つが「若者・女性に焦点を当てた人材育成」であった。先ほど私たちは新渡戸稲造基礎教育学校を視察したが、生徒たちの目の輝きと笑顔を見て、日本とジブチとの友好関係の象徴であると感じた。また、学んでいる男児と女児がほぼ半々であることを大変嬉しく思った。

(大臣) もう一つジブチ国民にとって印象深いプロジェクトが、現在建設工事が進んでいるパルマレ道路橋梁建設計画である。ここには「イタリア橋」という橋があるが、パルマレ橋梁も我々の心に届く支援であり、心の中では「日本橋」である。

また、現在ジブチには空港が一つしか無く、軍民共用であるため、緊急時にこの空港が使えなくなる事態を憂慮している。ジブチはアフリカの角地域の中で唯一の安定国であって、スーダンやイエメン、ソマリアといった不安定国で何かが発生した際には地域の待避所という形で対応オペレーションを行うための拠点となり得る。ジブチにおける日本のプレゼンスという観点からも協力が得られればありがたい。

(派遣団) 貴国は地理的に日本からインド洋を遠く隔てた位置にあるが、欧州とアジアを結ぶ主要な交易路に面する戦略的要衝に位置しており、「自由で開かれたインド太平洋」の推進にとって戦略的に極めて重要なパートナーである。我が国が貴国の理解と支持を得て、引き続き地域の海洋安全保障の確保に貢献していくことを期待している。



(写真) オマール外務・国際協力大臣との意見交換

2. ディレイタ国民議会議長との意見交換

派遣団は、1月7日、国民議会において、ディレイタ国民議会議長及び他の議会幹部（第一副議長、第二副議長、会計局長、官房長、日ジブチ友好議連会長、各委員長等）と意見交換を行った後、国民議会の議場を見学した。

（議長）ようこそお越しいただいた。両国の友好関係は古く長いものであり、皆様の来訪はこうしたモメンタムを継続させるものである。私は国民議会議長として開発や二国間関係の強化について取り組んできた。このような関係は相互に裨益するものである。

（派遣団）御多忙中のところお時間を作っていただき御礼申し上げます。今回ジブチには参議院のODA調査団としては2015年以来の訪問となる。ディレイタ議長は昨年6月に訪日され、外務・防衛両大臣を訪問されたほか、参議院議長にお会いいただいた。

両国が今後とも引き続き、開発のパートナーとして、対話を重ねながら、貴国の開発課題や国際社会の様々な課題の解決に共に対処していくことを期待している。

（派遣団）ジブチの食料自給率は3パーセントと伺った。両国は海外に食料とエネルギーを依存しているという点で共通しているが、貴国はどのような考え方でエネルギーや食料の問題に向き合っているのか。

（議長）エネルギーはジブチで非常に重要な課題であり、私が首相を務めていた時にエチオピアからエネルギーを送るパイプラインを作ったことで価格は落ち着いたが、それでもやはりジブチで何が高いかと言えばそれはエネルギーであり、この問題については非常に重視している。現在中国の支援する多目的港でも太陽光発電などの試みを始めているが、まだまだ発展途上のものである。ジブチは世界で最も暑い国であるので、今後に向けてジブチとしても注目していきたい。今はジブチでもクーラーが付いているが、かつては46、7度まで気温が上がってもそうした設備が無かった。また、ここ数年、気候変動の影響で雨が降るようになったが、その頃はまだ年に1回雨が降るか降らないかという程の干ばつ状況であった。

（第一副議長）議長の発言に補足する。ジブチにおいて耕作が可能な面積は7平方キロメートル程度しかない。雨も年に数回しか降らず、降っても治水技術が発展途上なので洪水状態となってしまう。アリ・サビエというジブチで最も大きい地方都市に貯水池を設けるなどして動物に水をやれるような環境が整備されつつある。ジブチは火山もあり土壌が酸性で非常に貧弱であるため耕作が難しい。食料自給率とい



（写真）ディレイタ国民議会議長及び議会幹部との意見交換

う観点でも現在イノベーション等に取り組んでいるが、自然は壮大でありなかなか難しいというのが現状である。気候条件についても周辺国でこの1月、2月に雪が降っている一方、ジブチでは26度程度と暑く、夏は50度近くに達するという非常に厳しい状況にある。ジブチでは今後食料自給率の向上のために前進していくつもりなので日本の協力もお願いしたい。

(第二副議長) 私は日本が草の根のスキームで支援した学校で働いた経験もあり光栄に思っている。スキームの規模は小さいがインパクトはとても大きいので、日本の皆様と今後も協力できればと思う。沿岸警備隊への巡視船供与や他の機関に対する支援にも感謝する。何より言及しなければならないのは日本の海外協力隊の方々にジブチ国内の至る所で働いていただいていることであり、特にこどもの教育に携わっていただき本当に感謝している。

(友好議連会長) 私も昨年議長と共に日本に滞在したが、日本の文化に心を打たれて、我々のカウンターパートとも意見交換をしてとても実りのある時間だった。大阪と広島に訪問する機会があり、街の美しさに感動した。私の出身地であるジブチ北部のオボックという町に行くには船を使わなければならなかったが、日本がフェリーを供与してくれたおかげで多くの住民とジブチ内の他の住民との連結性が高まった。感謝申し上げる。



(写真) ディレイタ議長の案内により議場を見学

第6 JICA海外協力隊員との意見交換

派遣団は、1月7日、ジブチにおいて、JICA海外協力隊員9名と懇談を行った。参加した各隊員の協力分野は、溶接、自動車整備、PCインストラクター、理科教育、体育、青少年活動、番組制作と多岐にわたっており、各隊員から現地における活動に際しての諸課題、前職が協力活動にどのようにいかされているか、現地コミュニティでの受入れ、暮らしに関わる困りごと等について意見を聴取した。



(写真) JICA海外協力隊員との意見交換